

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 27 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520698

研究課題名（和文）

昭和戦中・戦後期の日本の社会史と台湾—台湾人民衆の戦争体験と日本認識の記録化

研究課題名（英文）

Wartime and Post-War Showa in Japan and Taiwan— Recording The Taiwanese War Experience and Their Understanding of Japan

研究代表者

大谷 渡 (OHYA WATARU)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：80340644

研究成果の概要（和文）：戦時下における台湾民衆の戦争の記憶と体験を、聞き取り調査によってその生の声を記録化し、当時の新聞、雑誌、公文書、手紙、手記などとの照合検討をとおして、これを社会史的観点から多角的かつ具体的に解明した。その成果は、「国際交流研究集会 65 年目の証言」（2010 年）を関西大学で開催して広く社会に発信し、2011 年には『看護婦たちの南方戦線 帝国の落日を背負って』（大谷渡、東方出版、1-241 頁）として出版した。

研究成果の概要（英文）：I compiled interviews with Taiwanese survivors of the World War II generation. The interviews were compared with a range of documents such as newspapers, journals, public records, letters and personal notes from the period. The resulting record was then analyzed from a variety of sociological perspectives. The outcome of this work was published as "The Nurses' Experience of the battlefield in the Pacific War: The Burden of Sunset" (Ohya, Wataru, Toho Publishing, pp. 1-241, 2011).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近現代史・植民地史・戦争体験

1. 研究開始当初の背景

はるか昔の日本時代を懐かしむ穏やかな顔と、日本の戦争責任を鋭く断罪するきびしい視線。日本に対する台湾の二つの顔は、戦後史とも深く関わるものの、日本統治下の歴史を抜きにしては語れない。台湾の人びとが日本統治下でどのように生き

たのか。その時代と人びとの心の驍に目を向けて初めて、台湾と日本の真実に迫ることができる。大正・昭和初期に政治経済を論じ国際的に活躍した北村兼子と、台湾議会設置請願運動で知られる林献堂との思想的交流を明らかにすることから始めた私の研究は、大正中期に日本で高等教育を

受け台湾文化運動の担い手となった人たちの足跡をたどり、さらには大正中期に生まれ育ち日本の大学や専門学校に進み、戦争、敗戦を迎えた人びとの半生と心の歴史に迫る研究へと進展した。平成 16 年以降の台湾での実地調査に基づく研究成果は、平成 20 年 4 月に『台湾と日本 激動の時代を生きた人びと』（大谷渡 東方出版 pp1-244）として出版した。民族運動、デモクラシー、戦時下の教育、空襲体験などを綴った同書は、日本図書館協会選定図書となり、出版と同時に『産経新聞』（平成 20 年 4 月 12 日付夕刊）『中日新聞』（同年 4 月 20 日付朝刊）『読売新聞』（同年 6 月 12 日付夕刊）『東京新聞』（同年 6 月 12 日付夕刊）『毎日新聞』（同年 9 月 19 日付夕刊）などの書評欄や文化欄に取り上げられ、読者からも幾通かの手紙が寄せられ、「新しい知見を得た」「同様の本の出版を期待する」との好評を得た。

これまでの台湾における資料調査の過程では、日本統治下に生まれ育った 30 人近い人びとから直接取材し、その生の声を記録した。この調査は、日本統治下で高等教育を受けた人びとが、日本の近代化とその文化をどう受け止め、「台湾の幸福」をどのように実現しようとしたのか、その精神史をたどることを主眼としたが、取材過程で空襲・出征・敗戦に関する生々しい記憶と体験に触れることになった。日本では米軍による日本本土空襲の記録化や研究が大いに進展し、多くの文献、論文が発表されているが、台湾の人びとが戦争末期に米軍による激しい空襲にさらされ大きな被害を受けた事実は知られていない。今日の台湾にあっても、太平洋戦争末期の空襲と住民被害に関する研究は皆無に近い。台湾人志願兵や軍属についてみても、原住民兵士の記録や戦時動員についての研究や文献は存在するものの、いずれも概括的または部分的なものであって、出征した志願兵や従軍看護婦、軍属の体験を克明に記録し分析した研究は乏しい。

台湾での調査過程で知り合った蔡金水は、西部ニューギニア戦線から九死に一生を得て台湾に復員した。蔡金水の紹介者林啓三は、台湾最初の徴兵で初年兵教育を受け、歩兵砲中隊に配属されて台湾北部瑞樹

口の陣地で終戦を迎えた元日本兵である。戦時下に 20 歳代だった人たちの話を聞いていると、その回想は自然と戦中から終戦前後に及ぶ。『台湾と日本 激動の時代を生きた人びと』の執筆過程において、戦時下についての本格的調査を計画した私は、2008 年暮れに台北において黄玉緞に会うことができた。陸軍看護婦としてルソン島に派遣された彼女との出会いが、台湾人と日本人の従軍看護婦だった人たちを訪ね、彼女たちの青春と戦争の体験を記録し、その実相の詳細を明らかにする研究のきっかけとなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日中戦争・太平洋戦争期、および終戦まもない時期を対象とし、台湾民衆の戦争の記憶と体験を社会史的観点から多角的かつ具体的に解明することに力点を置いた。台湾人志願兵・軍属・従軍看護婦の出征、太平洋戦争末期の米軍空襲と台湾人住民の被害、終戦後の生活等々の実態を、口述資料と文字資料を収集し分析して記録化することにより、その歴史的意味を問おうとしたものである。

特に、これまで明かにされてこなかった台湾人従軍看護婦と日本人従軍看護婦に着目し、その史実を掘り起こし、戦時下の台湾の位置と台湾人看護婦たちを縦糸とし、日本人陸軍看護婦や日赤救護看護婦たちを横糸に織り込みながら、部隊と運命を共にした彼女たちの生き様をできるかぎり事実即して明らかにすることを目的とした。日中戦争、太平洋戦争全体での日赤救護看護婦の犠牲にも言及しながら、彼女たちの青春と戦場に目を向けることによって、あの戦争の実相を現代史の視点からあらためて問い直すことに主眼を置いた。

3. 研究の方法

本研究は、平成 16 年度以降の台湾における研究調査を通して築いた研究基盤の上に立って実施し、台湾の研究者はもちろんのこと、戦中から今日に至るまで実に長い年月、台湾社会の各分野で活躍し社会的に重要な位置を占めてきた人びととのつながりとその協力のもとに聞き取り調査と文字資料の収集を実施し、当時の新聞や雑誌、公文書との照合検討の上立って、一つ一つの事実を確定し、台湾人の戦争体験の実相に迫り、その歴史的意味を問う研究を行った。

日本国内では、国立国会図書館・防衛省

防衛研究所図書館をはじめ、全国の府県立図書館において関連資料を収集し、台湾では国立中央図書館台湾分館や国家図書館などで資料収集を行った。とりわけ重要だったのは、日本及び台湾において聞き取り調査に応じてもらった戦争体験者の一人ひとりから、長い年月大切に保管してきた写真や日記などの貴重な資料の提供を受けたことである。これらの資料は、図書館には所蔵されていないものであり、それぞれの人生とその内面に触れることのできるかけがえのないものであった。それらの資料を、大状況との関連において丹念に検討し分析して、歴史の真実を浮かび上がらせる手法をとった。

広東第一陸軍病院（波第 8600 部隊）と広東第二陸軍病院（波第 8601 部隊）に派遣された台湾人従軍看護婦については、広州市及び広東省において、彼女たちの勤務地だった場所や戦争末期の疎開地を確認し、実地調査を行った。さらに海南島の博愛病院に派遣された台湾総督府派遣看護婦の足跡を訪ねて海南島においても実地調査を行った。いずれも、現地調査なくしては得られない研究上の重要な成果に結びついた。

4. 研究成果

「祖国でない祖国を信じ、愛したのが馬鹿でした。」戦後 65 年もの間、日本人でありたいと願い続けた黄玉緞が、私にあてた手紙に記した言葉である。かつて、川島繁子と改姓名した黄玉緞は、たしかに大正生まれの日本人であった。大日本帝国陸軍部隊の看護婦として出征した彼女は、戦争末期の昭和 19 年暮れにルソン島北部山岳地に、命に服して部隊と共に入った。飢えに苦しみ、鉄の雨降る激烈な攻撃にさらされながら勤務につき、傷病兵を看取ったのである。

標高二千メートル近い山々と、深い谷が続く山の中で、日本軍部隊の看護婦たちは敗戦を迎えた。「ジャパン泥棒。ジャパン殺される。」と、フィリピン原住民の罵声を浴び、石や瓶を投げられながら、彼女たちは捕虜収容所に送られた。みじめな思いを胸に抱いて、川島繁子は半年後に故国台湾に復員した。

日米開戦後 1 年近い 1942 年（昭和 17）11 月に、台北と台南の陸軍病院から陸軍看護婦 2 班 26 人が、マニラの南方第十二陸軍病院（渡第 10612 部隊）に派遣された。

この中に、川島ら 9 人の台湾人看護婦がいた。翌年 1 月には、京都編製の陸軍看護婦七十余人が、京都のほか名古屋など各地から集められて派遣された。

陸軍看護婦たちがマニラに着いた時、すでに日本赤十字社救護班の看護婦たちが同病院の勤務についていた。日赤第 318 救護班の福岡支部派遣班は、日本軍のリングエン湾上陸のあとを追って、間もなくマニラに入っていた（『赤十字福岡九十年史』）。1944 年までに南方第十二陸軍病院に派遣された日赤救護班は、全国各府県支部に及び、その数は 500 人をはるかに超えた。戦争末期にルソン島で勤務についていた日赤救護班の看護婦の数でさえ、兵站病院配属や編成替えなどがあって、総数を正確に把握できないのが現状である。組織のしっかりした日本赤十字社の救護班ですら、不明なことが多い。ましてや陸軍看護婦について、ほとんどわからなかったのも当然かもしれない。

初めて黄玉緞から話を聞いた時、その内容には不明なところが多かった。彼女は自分の身の出来事を熱心に訴えるのだが、ルソン戦や日赤救護班について多少の知識がある私には、かえってその記憶の事実確定や置き所に苦慮するところがあった。注目したのは、彼女の話に出てくる日本人看護婦の名前であった。その中には、陸軍看護婦もいれば、日赤救護看護婦もいることが内容から推測された。この人たちは、いま健在なのか、住いはどこか、何もわからないが、日本に帰って根気よく探すことにした。

黄玉緞の記憶をもとに、日本赤十字社刊の『遺芳録』や『日本赤十字社社史稿』、マニラ会刊『アシンの谷間に』などの基本文献はもとより、全国各地の個人や団体が発行した手記を丹念に調べ、千葉・東京・名古屋・三重・滋賀・京都・大阪・山口・福岡など各地を訪ねて調査した。

黄玉緞の回想の中に出てくる人たちには、故人となった人や病床の人もあったが、健在である方がいて、そのうちの幾人かの人たちから貴重な資料の提供を受けた。その結果、部隊本部に直属していた陸軍看護婦の行動を通して、ルソン戦場での看護婦たちの全容に大きく近づくことが可能と

なった。しかも、班編成のゆるやかだった陸軍看護婦の記憶から、戦場に至るまでの彼女たちの青春に触れえたことは、救護班の看護婦たちについても同じ視点で見直すきっかけとなった。そして何よりも、台湾と台湾人に着目することによって、戦後の日本社会の中だけでは見えてこない、あの戦争の重要な側面が浮び上がることに気付かされたのである。

一方、ルソン島派遣の従軍看護婦に関する調査と並行して、広東第一陸軍病院と第二陸軍病院に派遣された篤志看護助手だった人たちからの聞き取りと文献調査を徹底的に行った。

日中戦争開始1年余り後の1938年(昭和13)10月に、華南のバイアス湾に日本軍が上陸した。広東占領は同月下旬、翌年2月に海軍部隊と台湾混成旅団が海南島に上陸した。広東と海南島は、北部仏印進駐を経て日本軍部隊が南方全域に展開する上での重要地となった。

蔣梅子(日本名・茂松秀子)と游彩月(日本名・岩崎彩子)は、終戦の前年に、台湾からの第3回戦地派遣看護助手として、広東第一陸軍病院(波第8600部隊)に配属された。第1回(1942年)と第2回(1943年)の広東地域への看護助手派遣は各200人で派遣期間は1年だったが、第3回は500人、期間は2年であった。傷病兵の看護に全力を注ぎ、空襲による病院の疎開を経て敗戦を迎えた茂松たちは、部隊と離されて中国軍に収容された。勝利軍への編入とは名ばかりで、便所もない廃工場に入れられ、ひもじさに耐えながら、中国人住民への公衆衛生業務などの奉仕作業に服した。市街地で「ヤッポン人、日本の鬼」と罵られ、石を投げられ、半年後ようやく台湾に復員したのであった。

平成22年3月には、ルソン島に派遣された日本人と台湾人の陸軍看護婦に関する研究成果の公表を目的として、国際交流研究集会「65年目の証言」を関西大学で開いた。研究集会開催の記事は、毎日・京都・読売の各紙に掲載され、とりわけ『京都新聞』は1面と17面に写真を入れて大きく報じた。当日は、市民や学生など来場者が200人を超えた。翌日の『読売新聞』は、「元陸軍看護婦証言生々しく 関大で研究集会」と報じた。来場者からは、「ぜひ研究成果を出版してほしい。」との要望が

寄せられ、その後の調査研究の成果を加えて、平成23年8月に『看護婦たちの南方戦線 帝国の落日を背負って』(大谷渡 東方出版 pp1-241)を出版した。同書は出版まもなく日本図書館協会選定図書となり、『産経新聞』8月11日付文化面に「従軍看護婦の証言集め戦争検証」と大きく紹介され、同日の『京都新聞』も「看護婦が見た南方戦線」の見出しで大きく取り上げた。平成23年10月1日には、元台湾篤志看護助手葉蔣梅を特別講演者として招いた関西大学での国際シンポジウム「青春と戦争の惨禍」で、大谷渡が基調講演を行なった。毎日・読売・日経・京都の各紙が予告記事を掲載し、来場者は300人に達した。

本研究によって得られた成果は、日本人と台湾人の戦中体験の解明とその真実の社会的インパクトにとどまらず、戦後の日台関係史研究における新たな展望につながる意味を持つものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ①「記憶の中の台湾と日本(6) - 統治下における戦争の体験」大谷渡、『関西大学文学論集』、第61巻第4号、1-24 (2012)、査読無
- ②「帝国の落日を背負って-野戦病院と遺芳録から-」大谷渡、『青春と戦争の惨禍 大阪日赤と救護看護婦 研究報告集』、3-12 (2011)、査読無
- ③「記憶の中の台湾と日本(5) - 統治下における戦争の体験-」大谷渡、『関西大学文学論集』、第60巻第4号、1-25 (2011)、査読無
- ④「問い続けたいあの戦争と平和について-日本人・台湾人陸軍看護婦とルソンの戦場-」大谷渡、『国際交流研究集会 65年目の証言 日本人・台湾人陸軍看護婦とルソンの戦場 研究報告集』、3-14 (2010)、査読無
- ⑤「陸軍看護婦門脇初代の戦場日記について」大谷渡、『国際交流研究集会 65年目の証言 日本人・台湾人陸軍看護婦とルソンの戦場 研究報告集』、43-57 (2010)、査読無
- ⑥「記憶の中の台湾と日本(4) - 統治下における戦争の体験-」大谷渡、『関西大学文学論集』第59巻第4号、23-45 (2010)、査読無

[学会発表] (計2件)

- ①「帝国の落日を背負って-野戦病院と遺芳録から-」大谷渡、大阪都市遺産秋の国際シ

ンポジウム (2011、関西大学)

②「65年目の証言 日本人・台湾人陸軍看護婦とルソンの戦場」大谷渡、国際交流研究集会 65年目の証言 日本人・台湾人陸軍看護婦とルソンの戦場 (2010、関西大学)

[図書] (計1件)

①『看護婦たちの南方戦線——帝国の落日を背負って』大谷渡、東方出版、1-241 (2011)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大谷 渡 (OHYA WATARU)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：80340644